

# 小学校における 「書くこと」の学習支援の実践的研究

— 高学年における構成指導を中心に —

学籍番号 209304

氏名 東 直宏

主指導教員 土山 和久

## 1. 研究の背景

本研究は、構成指導によって小学校高学年の「書くこと」における児童が抱えているつまづきを取り除くよう支援し、構成意識が児童の文章だけでなく、資質・能力にどのように寄与するか実践研究を通して考究することを目的としている。

## 2. 基本学校実習Ⅰ・Ⅱにおける研究の概要

2年間の実習は、大阪市立の公立小学校にて行った。基本学校実習Ⅰでは、実習校の年間目標「生きてはたらく言語能力」のもと、アクティブ・ラーニングとして様々な言語活動が行われていた。どの言語活動も「考えの変容」がなされることをねらいとして行われ、「話すこと・聞くこと」がその中心を担っていた。「書くこと」に関して、物語教材の初発の感想から筆者の意図や工夫を理解して書いている児童がいれば、論理的な言語につまづきを抱えている児童や、感情や思考を表現することに課題を持つ児童の様子が観察できた。

基本学校実習Ⅱでは、感情や思考を書かせるにあたり、構成を通して、整理し文章に起こしやすくすることをねらいとして本の紹介文を書く研究授業を行った。

## 3. 基本学校実習Ⅱを踏まえた研究構想の深化

基本学校実習Ⅱにおける、構成によって思考や感情を整理し書くことの支援に繋がると考えたが、思考や感情を書く際には、スキル面からみた書く力だけではなく、精神面からみた書く力の育成が必要であること。好きなものを紹介するには、理解プロセスレベル、主体レベル、社会的レベルの社会的資質・個人的資質が多次的に同時進行でおこなわれることから、教職大学院2年の学びでは、その資質・能力の育成にたどり着くのは難しいと感じたことから、研究の方向性を変えることとした。思考や感情ではなく、意見文に着眼を置くこととした。また、構成の4つの側面に着目し、構成指導を中心にこなうこととした。

## 4. 発展課題実習 I における研究の概要

発展課題実習においては、従来言われている「文章の型」といったテキスト外構造からの書くことの支援を行った児童の実の場に合った 6 つの議題を班にそれぞれ配布し、意見文を書く研究授業を行った。型を意識させることで量的、質的に文章が向上することをねらいとした。

結果としては、型を使うことで構成の意識を向ける児童が多かったものの、構成に意識が向かない児童も見られた。原因としては、議題をどのように対象かするか、自身の経験や体験とデータや資料を対象化し捉える力の不足していることや、文章によって相手にどのように伝えるか、といったコミュニケーション能力の不足していること、構成の意義が伝わっていなかったことが考えられた。そのため、情報を収集、比較、分類する力、自分自身や自分の考えを俯瞰的に考えられる児童の育成が必要になると考察した。

## 5. 発展課題実習 II における研究の概要

発展課題実習 II では、問題解決型のフレームといった認知方略を使ったテキスト内構造が書くことに支援的に働く可能性があると考え、論説型の意見文を書かせる言語活動を行った。議題に関しては、「あなたはフェアトレードに関する問題をどう解決しますか」といった教科書に則った社会的な事象と、「学校を美しく保つ方法」といった児童の実の場に合った 2 つの議題について書く言語活動を行った。

結果としては、構成メモを全ての児童が半分以上書けており、文章も量的に増加する傾向が見られた。2 つの議題に対してそれぞれ多面的、多角的に捉えられている児童が増加した。そのため、問題解決のフレームを使用したテキスト内構造は、書くことの支援に繋がる可能性が見えた。

## 6. まとめ

2 年間の研究を通して、構成を意識させることが文章にどのように寄与し、書くことが苦手な児童にどのように支援に繋がるか、実践的研究を行った。

書くことにおいて、従来言われていた「文章の型」すなわちテキスト外構造だけでなく、フレームを使用したテキスト内構造も指導・支援に繋がる可能性が見られた。

しかし、多くの課題も残す結果となった。構成が持つ文章によるコミュニケーション能力の側面や、情報の取捨選択の側面について効果的な活動を行えなかった。情報の取捨選択の力は、現代の情報社会において、必要とされている資質・能力である。また、構成段階以外にも書くことで育まれる資質・能力はあると考えている。それを整理し、「書くこと」が従来言われてきた資質・能力に留まらず、社会を切り開く資質・能力になり得ること、学習者が未来を切り開くための力になるのか探っていきたい。